



■卒業式式辞

先日の大雪を忘れるかのような、ここ数日の暖かい春の日和の中、蒼雲館前の梅も春を待ちわびたかのように蕾をふくらませて咲き始めようとしています。

本日は、雲南市教育委員会教育長小田川徹哉様をはじめ、多数の来賓の方々のご臨席を賜り、卒業式を挙行することができました。誠にありがとうございます。

昨年度の卒業式は、4年ぶりに多くの来賓の方々をお迎えし、1・2年生も同じ空間で卒業生の晴れ舞台をお祝いするコロナ禍前の形態に戻して挙行することができました。卒業生の皆さんが1年生の時は教室でのリモート参加でしたね。コロナ禍では、式後のホームルームに保護者が参加できず、保護者の皆さんに感謝の気持ちを伝える卒業生のメッセージもモニターを介してのものになった年もありました。皆さんが中学3年生の時の卒業式もコロナ禍の影響を受けて制限のある開催だったことと思います。今こうして、当たり前のように全校生徒・保護者の皆様・そして多くの来賓の皆様とともに、卒業生の皆さんの門出を祝えることはこの上ない喜びです。

来賓の皆様方には、卒業生を様々な面で支えていただきました。重ねて感謝申し上げます。生徒達は、本日高校を巣立っていきますが、これからの人生において向き合うべき幾多の局面があると思います。20年後、30年後の地元雲南市・島根県を支えていく若者達に、地元を愛する先輩として、今まで同様のご支援をお願いいたします。

保護者の皆様、お子様のご卒業おめでとうございます。小学校・中学校の卒業式とはまた違う思いをされている方が多いのではないのでしょうか。4月からは社会人の仲間入りをするお子様、親元を離れて県外に旅立っていくお子様もいらっしゃると思います。お手元の卒業式の栞にはさまれているお子様にあてたメッセージには、これまでのお子様との思い出や、これまで伝えることができなかった思いなどが数多く寄せられています。私は昨年の卒業式でも保護者の方に同じお願いをしました。今年もそのお願いをします。それは、保護者の皆様には、お子様が巣立っていく前に、人生の先輩としてご自身のこれまでの経験の一端を、ぜひ自らの声でお子様に語りかける機会を持っていただきたいということです。学生時代のこと、就職・仕事のこと、転機となった出来事など何でも結構です。生徒たちは、今後自身が向き合うべき多くの局面で必ずその言葉を思い出すはずです。保護者としてだけでなく、メンター（助言・指導者）としてお子様を支えていてもらいたいと思います。

さて、卒業生の皆さん卒業おめでとう。今年度は開校100周年というメモリアルイヤーでした。4月17日の式典では生徒会を中心として皆さんが大きな役割を果たしてくれました。今年の卒業式は高校として第77回ですが、旧制中学校、併設中学校時代に開催した卒業式を合わせると丁度100回目の卒業式となります。皆さんは、開校100周年と卒業式100回目を同時に体験する記念すべき卒業生です。

そして、皆さんは私にとっても特別な卒業生です。校長として卒業証書を渡す最後の卒業生で

す。皆さんとは、入学以来ずっと三高での生活をともにしてきました。皆さんは、生徒会活動や部活動などにおいて、常にリーダーシップを発揮して三高の教育活動を牽引してくれました。2年次の東京方面研修旅行も一緒に行きましたね。学年集会の際、私の話が終わると必ず拍手をしてくれました。あまりないよね。でもとても嬉しかったです。

私は、昨年度から『向き合う。その先に… (Face it. Beyond that…)』を学校の合言葉として、皆さんに「自分自身が抱えている悩みや課題に向き合ってみてはどうですか?」「今の自分を少し超えて、今以上の自分をめざして、今一度自分自身に『向き合って』みませんか?」と問いかけてきました。自分自身に向き合うことは決して楽なことではありません。時には、壁にぶち当たることもあるかもしれません。しかし、日米で野球殿堂入りを果たしたイチローさんは「壁というのは、できる人にしかやっこない。超えられる可能性がある人にしかやっこない。だから、壁がある時はチャンスだと思っている。」と壁の存在をポジティブに捉えています。また、明治初期の自由民権運動家、植木枝盛は「未来が其の胸中に在る者、之を青年と云ふ」「過去が其の胸中に在る者、之を老年と云う」と表現し、未来に向かって挑戦し続ける“青年”的生き方、過去にしがみついて挑戦をためらう“老年”的生き方について述べています。変化が激しく正解を見出しにくい、これからの社会を生きていく皆さんには、これまでの自分に向き合いながらも、未来を志向し自分自身の可能性を追求する“青年”的生き方を目指してほしいと思います。

卒業生の皆さん、これからの長い人生には選択や決断を迫られる様々な局面があると思います。そんな時には、この未来に向かって挑戦し続ける“青年”的思考と保護者から聞いたリアルな経験談を思い出して、直面する課題や自分自身に向き合いながら乗り越えていってください。コロナ禍も乗り越えてきた皆さんならきっとできるはずですよ。急がなくてもいいですよ。じっくりゆっくりと『向き合い』ながら自己を表現していきましょう。

大丈夫ですよ。

小説家の下村湖人は、その著書『青年の思索のために』の中で、ある飛行家が長距離飛行の秘訣として常に守っていたといわれる言葉を紹介しています。今、人生の大飛行となる未来の社会へ羽ばたいていく皆さんに、その言葉を贈ります。

「高く飛べ。まっすぐに飛べ。ゆっくり飛べ。」

以上、式辞とします。

令和7年3月1日

島根県立三刀屋高等学校

校長 本間 達也